大分市歷史資料館 ニュース

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

vol. 77
2006.12.2

柞原八幡宮境内絵図（部分）

大分市歷史資料館 テーマ展示Ⅲ

絵図を読む－描かれた大分

12月2日(土)～1月28日(日)

トピックス

ふれあい動物園

トピックス

ふれあい動物園

11月3日の文化の日、特別展「ゾウがいた！　象が来た？」の関連イベントして、資料館が動物園に大変身と銘打ち、資料館に隣接する豊後国分寺跡史跡公園で、「ふれあい動物園」を開催しました。

500人をこえる親子連れが訪れ、ヤギやひつじ、ポニー、そして、うさぎやモルモットといった可愛い動物たちに触ったり、えさをあげたりして、楽しく過ごしていました。

外での動物園にあわせて、資料館内では折り紙でゾウを作るコーナーを設けました。子どもたちは職員に折り方を教えてもらい、いろとりどりのゾウを作っていました。

また、会期中行っている展示品やゾウについてのクイズにも多くの子どもたちがチャレンジしてくれました。問題用紙を片手に、答えを探して、会場内を行ったり来たりし、ヒントをお父さんやお母さんに聞く子どもたち。とてもほほえましい光景でした。

今回の特別展は、子どもたちに楽しんでもらおうと企画した展覧会です。すがすがしい秋空のもと、資料館の内外に子どもたちの歓声が響いたこの日は、職員にとってもとても楽しく、気持ちのよい一日となりました。

利用案内

■開館時間　9時から17時（入館は16時30分まで）
■休 館 日　毎週月曜日(祝日の場合は開館)
ただし、毎月第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館（祝日の場合は開館）
祝日の翌日（土・日曜日の場合は開館）
年末年始（12月28日～1月4日）

■観 覧 料　大人200円（団体150円）　高校生100円（50円）
※団体は20名以上、中学生以下は無料
※特別展開催中は別料金となる場合があります。
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。受付で手帳を提示してください。

■住　　所　〒870-0864　大分市大字国分960-1　TEL097-549-0880

■交通機関
JR久大本線
※豊後国分駅下車
大分バス
国分新町ゆき
※歴史資料館入口下車
大分自動車道
大分IC、光吉ICからともに約15分

インフォメーション　Information

ふれあい歴史体験講座

実施日と内容　12月23日(土)　和だこ作り
1月27日(土)　勾玉作り

時　間　9時30分～／14時～(各回約2時間)

参加費　和だこ　1個　200円
勾玉　大1個　200円　ミニ1個　190円

定　員　各回70名（先着順）

申し込み　電話でお申し込みください。
和だこは12月9日、勾玉作りは1月10日より受け付けます。

テーマ展解説講座

内　容　講座室でテーマ展「絵図を読む」についてスライドなどで解説したのち、展示室をご案内します。

日　時　12月10日(日)　14時～15時30分

講　師　歴史資料館職員

参加費　展示をご覧になる場合は観覧料が必要です。

ミュージアム・シアター

実施日　12月10日(日)　色鍋島／化政文化
1月28日(日)　絵図に偲ぶ江戸の暮らし
国東の修正鬼会

時　間　13時～14時

料　金　無料　　申し込み　不要

発行日：平成18年12月2日
発　行：大分市歴史資料館　〒870-0864　大分市大字国分960-1　☎097-549-0880
※ホームページ　http://www.city.oita.oita.jp/（大分市ホームページ）の「施設ガイド」も併せてご覧ください。

大分市歴史資料館　テーマ展示Ⅲ

絵図を読む－描かれた大分

会期:平成18年12月2日（土）～同19年1月28日（日）

写真や映像が普及する以前、絵図は物事の情報を視覚的に伝える有効な手段として利用され、またさまざな目的で描かれていました。それらの絵図は、時代を越えて、文書などでは理解しにくい昔の風景や人々の生活、歴史などを現代のわたしたちに伝えてくれます。

本テーマ展では、絵巻や城絵図・村絵図・社寺図などの絵図を通して、在りし昔の大分の様子や歴史を紹介します。

表紙について　柞原八幡宮境内絵図

明治23年に出版された柞原八幡宮を描いた多色刷りの木版画です。同宮は江戸時代まで、神仏混合により境内には多宝塔・普賢堂など仏教施設が多くありましたが、明治時代になると神仏分離政策によって仏堂や仏像が取り除かれてしまいました。

本図では既に仏教施設はなく、社殿のほか多くの末社が描かれています。それら中には現在ないものもあります。また、南大門（日暮門）から東へ伸びる道も現在利用されていません。

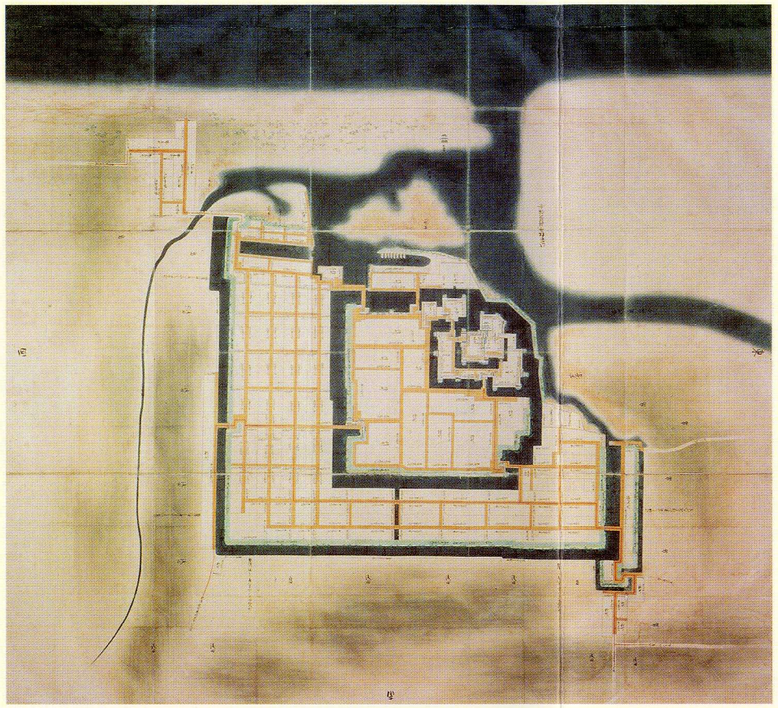
正保の城絵図ー「豊後府内城之絵図」（複製）

府内藩が正保年間（1644～48年）に江戸幕府へ提出した府内城の絵図です。府内城は、慶長２年（1597）に福原直高が大分川の分流と住吉川が合流する河口部の荷落（後に荷揚と改められた）と呼ばれた場所に新たに城を築いたことにはじまります。その後府内藩主となった竹中氏によって城郭の増築および城下町の建設がすすめられ、慶長12年（1607）に城と城下の全体がほぼ完成しました。

本図はその約40年後の状況を描いており、天守・櫓門・塀・石垣・橋などの城の主要な施設は外観までもが描写されています。天守は独立したものではなく、北側と南側に取り付け櫓や渡櫓・櫓門などをもつ４層の層塔形式でした。また、侍町や町屋の各居住区画の外側には堀とともに土居が築かれ、その上に松が植えられていたことがわかります。城のすぐ北は芦原が広がり、その先の河口近くには海上交通を監視するための船番所が置かれていました。

こうした施設とともに当時の歴史を物語る記載もみられます。侍町東端の堀を隔てた一画には、徳川家康の孫で豊後に配流となった松平忠直（一伯）を監視するために江戸幕府から派遣された府内目付の屋敷を示す「御目付衆屋敷」の書入れがあり、また、船番所の対岸には「此所松平将監領分」の書き込みもあり、現在の中島町の辺りが当時高松に陣屋を構えのちに府内藩主となる大給松平忠昭の領地であったことも分かります。

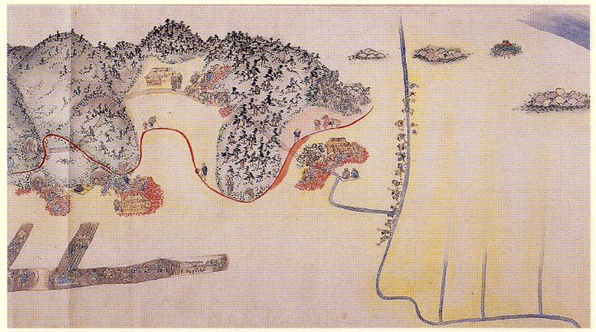
（原本　内閣文庫蔵）

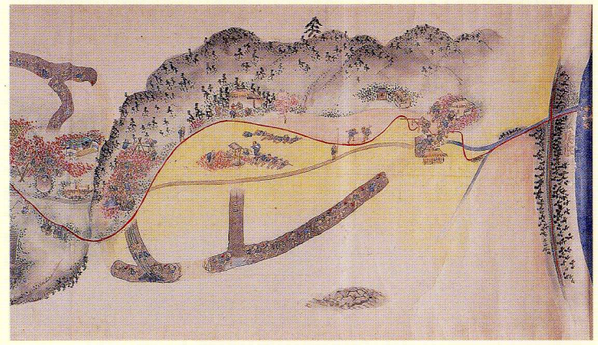


嘉永井路絵図（下宗方区有）

水不足に悩む臼杵藩領の下宗方・八幡田の村人たちが行った嘉永井路（水路）開削工事の様子を描いた絵図です。大分川の取水口から小野津留村を経て上宗方村の丘陵下（現在の椿ヶ丘団地下）を通り下宗方村へと通じるこの井路工事では、岡藩の尾平山から広右衛門・綱五郎の二人の鉱山技術者を招き、近隣の村々からの加勢も得て、弘化３年（1846）11月の着工から約１年半の歳月をかけて嘉永元年（1848）５月にようやく完成をみました。

絵図には、鍬やツルハシでトンネルを掘る者、掘り取った土砂をカゴに入れて運ぶ者、縦穴を通してモウソウ竹で作った吹子で風を送る者、地上で測量を行う者など、難工事をきわめた開削工事の様子が描かれています。また、取水口となった大分川沿いの田原・小野津留村から灌漑地の下宗方八幡田村にいたる稙田地域の当時の景観や村人たちの風俗もうかがうことができます。



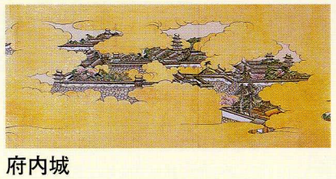


御城下絵図（大分市指定文化財）

大給松平氏が藩主であった頃の府内城下の様子を描いた絵巻物です。別府湾へ流れ出る大分川の景観にはじまり、四層の天守をもつ府内城、その城下の西側を流れる住吉川に架かる仙石橋、そこから住吉宮の「船祭」を見物する人々、府内藩最大のイベントとされた柞原八幡宮の放生会の神事や、その祭礼市「浜の市」で興行された人形芝居や花火大会の様子など、府内城下の賑わいが、祭りの見物に行く藩主の行列を軸に描かれています。

この絵巻にみえる景観は、寛保３年（1743）の大火で焼失したあと再建されなかった府内城の天守が描かれていることから、大給松平家が府内城主となった万治元年（1658）から寛保３年（1743）までの間と考えられます。図中の女性の多くにみられる、髪を折り返して元結で止め後頭部の髪を大きく張り出した島田髷という髪型は元禄期（1688～1703）に大流行しており、風俗からもほぼ同時期に比定できます。城下北西に設けられた堀川口門や、神宮寺・春日社・王子社・光明寺・火王宮の神社・仏閣、蓬莱山・祓川・笠結島などの図中の景観は、この頃の状況を物語っているものと考えられます。

浜の市での花火大会



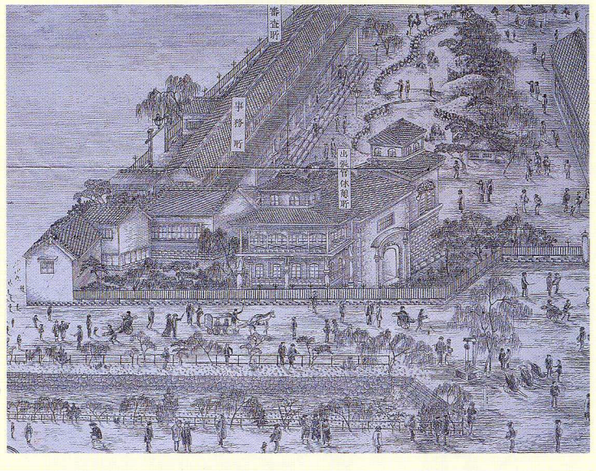
府内城

住吉宮と仙石橋　住吉宮は、延宝５年（1677）に西應寺境内から絵図に描かれた現在地（住吉町2丁目）に遷座されたという。旧暦６月28日に行なわれた同宮の「船祭」では、神輿を乗せた船や謡船など６艘の船が海上を渡御し、神社の内外に露店が並び、賑わったという。また、仙石橋は、天正14年（1586）大友義統が住吉川に橋を架けたことにはじまるという。当初は土橋であったが、承和２年（1653）に木橋に架け替えられ、宝暦３年（1753）に石橋となった。

光明寺　駄原村（現在の王子町）にある浄土真宗寺院。女性の着物が干されているが、妻帯が許されていた真宗寺院ならではの光景である。

若一王子　現在の王子神社。絵図の石の鳥居がある場所に、現在は寛政８年（1796）に府内藩主松平近儔が奉納した鉄製の鳥居が建っている。

第６回九州沖縄八県連合共進会会場図



旧府内城の中堀の南側を埋めて出来た南新地で明治21年（1888）に開催された九州沖縄八県連合共進会の会場図です。図中の「出張官休憩所」と記された三階建ての建物は明治６年に創立された銀行の一種である旧登高社を利用したもので、会場前の水路は中堀西側跡になります。中堀を挟んだ両通りが当時の碩田橋通りで（現在の中央通り・大分銀行赤レンガ館付近）、洋装の男性や人力車など、賑わう様子は「明治」という新しい時代を感じさせます。